

## 船井情報科学財団 第8回中間報告書

田主 陽

2020年6月

Ph. D. candidate, Department of Chemistry, Massachusetts Institute of Technology

他の多くの大学と同様、MITでも3月中旬からCOVID-19の流行の影響で約3ヶ月間大学がシャットダウンされ、研究室に出入りできなくなりました。在宅勤務の期間は実験が全くできなかつたため、主に溜まっていた論文の執筆に加え、指導教官と相談して総説論文を書くことにしました。私の研究分野はややマイナーで、40年ほどの歴史の中で発表された論文の数はおよそ200本ほどです（化学分野ではとても少ない数です）。今回は別々の著者によって書かれたそれらの論文を全て網羅し、研究の歴史や流れ、そして今後への展望などを含めて一つの論文としてまとめます。通常の論文とは全く違う書き方になるため、とても良い経験になりました。また、今回まとめた事柄は博士論文の序章に書く内容でもあるため、そちらにも役立ちそうです。

実験はちょうど2週間前からReopeningのPhase 1が再開したところで、現在週18時間の研究室での作業が許可されています。普段の半分以下の1日4時間で全て作業を終わらせなければならぬため苦労していますが、人が少ないため実験装置の待ち時間が短かったり、普段以上に事前に計画を立てて実験したりということもあって、意外と進められるなという印象です。また、現在の状況では進捗をそれほど要求されないため、卒業が近いこともあって最近やや消極的になっていた挑戦的な実験にも取り組んでいます。ちなみに6月からは2015年FOS奨学生の荻田譲さんが私の所属研究室に加わって、研究室の12人中3人が日本人という不思議な状況です。この3人のシフトが重なっていることもあって、最近は大学に行っても英語を話すことがほとんどなく、留学している実感がなくなってきました。

インドアの趣味が多く、デスクワークも溜まっていた自分は外出自粛自体にはそれほどストレスを感じなかったのですが、学会参加の機会など失ったものはやはり多いです。7月に参加する予定だったゴードン会議(Gordon Research Conference)は中止となり、12月に参加予定のPacifichem 2020も中止またはオンライン化となりそうです。今後の収束状況によっては、卒業時期の遅れや、就職活動への影響もさらに大きくなるように思えます。マサチューセッツ州では迅速な対策が功を奏したのか、6月末現在でアメリカの中では比較的順調に収束に向かっており、治安の悪化などもそれほどありません。今後もこの傾向が続くことを祈るばかりです。